

国 語 科

古典に親しむ態度を育成する中学校国語科の授業づくり

—クイズ形式を取り入れた故事成語の学習を通して—

石 川 嘉 一

Making Japanese Classes of Fostering Familiarity with Classics in Junior High School —Using Quizzes about Classical Idioms—

Yoshikazu Ishikawa

The purpose of this study is to reveal what the Japanese class in junior high school should be, in order to foster familiarity with classics, especially Chinese classics using quizzes about classical idioms (KOJISEIGO), which are derived from historical events or classical literature of China. First, the students were required the basic way of reading Chinese characteristics, and understood how Japanese people in the past tried to read Chinese language in Japanese language. After that, they grasped the history of how some classical idioms was built up. Finally, some groups of the students gave quizzes about some classical idioms which are not shown in their text books. The study examined that some students in groups cooperated with each other, and also thought about the origin of classical idioms with their interests during answering quizzes. In summary, the students seem to have fun to learn classical idioms through group work. (p.168-173)

1 はじめに

去る平成 28 年 12 月 21 日に、中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申が出された。これを受け、幼稚園、小学校、中学校の新たな学習指導要領等は今年度中、高等学校については来年度中に改訂が行われ、周知等の期間を経て、幼稚園が平成 30 年度から、小学校が平成 32 年度から、中学校が平成 33 年度から、高等学校が平成 34 年度からそれぞれ実施される予定となっている。

答申の言葉¹⁾を借りると、「知識・情報・技術をめぐる変化の早さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測

を超えて進展するようになってきている」近年、「これからの学校教育においては、『生きる力』の現代的な意義を踏まえてより具体化し、教育課程を通じて確実に育むことが求められて」おり、「『何を知っているか』にとどまりがちであり、知っていることを活用して『何ができるようになるか』にまで発展していない」現状を打破しなければならない。

教科においては、「これからの時代に求められる資質・能力」を見据えて、「何を教えるかという内容は重要ではあるが、前述のとおり、これまで以上に、その内容を学ぶことを通じて『何ができるようになるか』を意識した指導」が求められることになる。

本学校園では、新領域「希望（のぞみ）」を設

置し、その中で育成すべき資質・能力として、キャリアプランニング能力(なりたい自分になる力)、人間関係形成・社会形成能力(関係を構築する力)、課題対応能力(達成へ向かう力)の3つを設定し、研究を進めている。昨年度からは、これらを全教育活動で育成すべき「通教科的な能力」として位置付け、保育・教科においても、保育・教科の本質に根ざした資質・能力との関連を明らかにして育成することを目指している。

本校国語科では、教科の本質を「思考・認識・伝達・創造の基盤を成す国語力」の育成と捉えている。そして、「通教科的な能力と関連的に育む国語科の本質に根ざした資質・能力」として、キャリアプランニング能力を「国語を尊重し、言語生活の向上を志す態度」、人間関係形成・社会形成能力を、「コミュニケーション能力の基盤を成す国語の運用能力」、課題対応能力を「論理的思考力・想像力の基盤を成す国語の運用能力」と整理して研究を進めている²⁾。

本研究では、クイズ形式を取り入れた故事成語の学習の中で、成り立ちや意味を小グループで考えることを通して、古典に親しみ、国語を尊重する態度、延いては「通教科的な能力」を育成するための中学校国語科の授業のあり方を明らかにすることを目的とする。

2 研究の方法

(1) 対象生徒

中学校1年生 40名(1クラス)

(2) 単元名

伝統—時を超えて「故事成語」 学校図書 中学校国語1

(3) 教材について

本単元は、「五十歩百歩」「矛盾」の2つの故事成語を取り上げ、その用法や背景について学ぶものである。「故事成語」は、中国の古い出来事をもとにしてできあがった言葉である。古くから我が国で親しまれてきたもので、ひとつひとつの短い言葉の中に込められた教訓などに、影響を与

えられたものも少なくない。しかも、現代においても生きる考え方も多くあり、生徒たちが興味を持って学ぶことのできる教材であると考えた。また、単元後半には、故事成語の正しい意味を選ばせるクイズ形式の学習を取り入れることにより、生徒が楽しみながら故事成語に親しむことができると考えた。

本単元学習前の、古典についての学習状況について、対象学年の生徒は今年度の9月に行われた文化祭で「御伽草子 浦島太郎」を題材にした発表を行った。チームに分けて発表を行ったのであるが、半数の生徒は「群読チーム」として、原文(古文)を声に出して読んだ。また、教科書教材では本単元の前に「竹取物語」の学習をしており、古文のリズムには慣れてきているものと思われる。しかし、漢文に本格的に触れるのは初めてとなるので、説明が専門的すぎることはないよう、いわゆる漢文嫌いを生まないように留意する必要があると考えられた。

対象学級の生徒は、おおむね前向きに国語科の学習に取り組んでいる。しかし、進んで発表をするなどという積極性に少し欠けるところがある。また、授業中に集中力が途切れる者もいる。そして、班での学習など複数名での活動では、目的を見失って時間内に成果を上げられないというような場面もある。そこで、興味を引くような手立てを用意し、集中力を持続させたり、生徒同士の交流で学習が深まったりするような構成を工夫する必要があると考えた。

指導のおおまかな流れとしては、まず、漢文の基本的な読み方を学ばせ、中国の言葉を先人たちがどのように日本語として読もうとしてきたかを理解させた。次に、故事成語がどのような故事に基づいて、どのようにしてできあがったかという成立の流れをつかませた。その後、教科書に挙げられている「五十歩百歩」と「矛盾」という2つの故事成語について、どのようなことを伝えようとしているのかをつかませた。最後に、教科書にあげられていない故事成語について、その意味を班ごとにクイズ形式で出題させた。クイズを考え

る過程において、より深く、自分たちが担当する故事成語について学ばせ、またクイズに答える過程で、班員との交流や故事成語の成立過程を考える活動を行わせた。

(4) 目標

- 故事成語やさまざまな言葉の成り立ちについて興味を持って学ぼうとしている。
- それぞれの故事成語がどのように成立したのかということに注意して読み、内容の理解を深めている。
- 返り点の用法や送り仮名について理解している。
- さまざまな故事成語の意味・用法・背景について理解している。

(5) 授業構成 (全8時間)

(単元外 辞書クイズについて知ろう・・・1時間)

- 第1次 漢文の読み方・故事成語とは何かを学ぼう・・・2時間
- 第2次 「五十歩百歩」とはどういう故事成語か理解しよう・・・2時間
- 第3次 「矛盾」とはどういう故事成語か理解しよう・・・2時間
- 第4次 辞書クイズをしよう・・・2時間

(6) 授業の実際

本研究では、特に「通教科的能力」を意識して学習を進めた、単元外で行った辞書クイズについて慣れる活動、及び実際に故事成語で辞書クイズを行った第4次について詳しく述べる。

<単元外 辞書クイズについて知ろう>

本単元の学習を行う前に、「辞書クイズ」という形式に慣れるため、現代語の単語を対象としたクイズを行った。なお、このクイズは「たほいや」と呼ばれるものであり、25年ほど前にテレビ番組としても放送されていた。以下に授業で説明したゲームの手順を挙げる。

- ①班対抗のゲームのため、4人班で1つのグループを作る。
- ②電子辞書の広辞苑から、誰も聞いたことのないような言葉を見つける。(例として「おねげる」を挙げる。(図1))

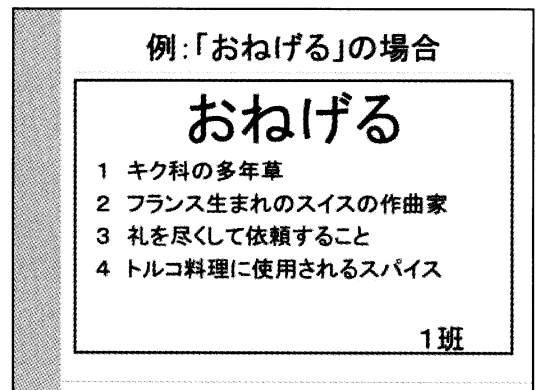


図1 出題のしかたの説明

- ③紙の上の部分にその言葉をひらがなで書く。(カタカナや漢字だとヒントになる可能性があるため。)
- ④選択肢を4つ作り、そのうち1つに辞書に書かれた本当の意味を書き写す。
- ⑤それ以外の3つには、辞書に書いてありそうな嘘の意味を考えて書く。(図2)

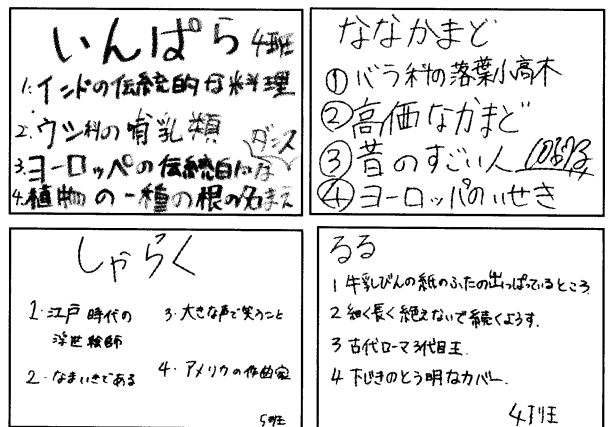


図2 それぞれの班が作成した問題

- ⑥順番に1班ずつ出題する。
- ⑦出題班以外の班でそれぞれ答えを相談し、ホワイトボードに正解と思う番号を書いて挙げる。
- ⑧問題を出した班は、正解を発表する。
- ⑨正解した班に1ポイント加える。不正解の班の数が問題を出した班の得点となる。
- ※自分以外の9班のうち、3つの班が正解したらその班にそれぞれ1ポイント、問題を出した班は6ポイントもらえる。
- ⑩2回繰り返す、合計得点で競う。

この授業を振り返っての生徒の感想を挙げる。

- ・知らない言葉を知ることができた。
- ・とても楽しく学べた。
- ・たくさんの分からない言葉があつて、それらを知ることプラス班全員で考えることができた。
- ・みんなの考えた問題は難しかった。

全体を通して、「楽しかった」という感想が多かった。またクイズがしたいという声も多く、この形式に対してはしっかり慣れていることが感じられた。

<第1次 漢文の読み方・故事成語とは何かを学ぼう>

まず、漢文を学ぶ上での基礎知識として、中国から漢字のみで伝わってきた文章を、先人たちがどのようにして日本語として読もうとしたかを学んだ。まさに今、自分たちが学んでいる外国語である英語との関係に置き換え、他の言語では語順の違いなどがあることに気づかせた。それを補うために、返り点を生みだしたことなどを学んだ。また、英語であればアルファベットという全く違う文字を使う言語体系であるが、中国語は漢字を使用するという共通点があり、そこから意味が類推できることなどをふまえ、伝統的な言語文化に目を向けることを期待するものであった。

その上で、故事成語とはどのように成立してきたのか、また、そうして作られた故事成語が、現代の日本においても使われていることなどについても学んだ。

<第2次 「五十歩百歩」とはどのような故事成語か理解しよう>

第2次では、「五十歩百歩」という故事成語がどのようにしてできたのかについて学んだ。

これは、梁の国の恵王という王様が、「自分は凶作の時に民を移住させるなど、常に自国の民に心を配っているのにもかかわらず、何もしていないように見える隣の国と同じく人口が増えないのはなぜか。」と孟子に尋ねたところ、戦のたとえ話をを用いて、「戦場から五十歩逃げた者が百歩逃

げた者を、臆病者、と言って笑ったらいかがでしょうか。」と答えたことに由来している。恵王は、「両方とも逃げ出したことに変わりはない。」と言うのだが、そこで孟子は、「凶作の時に民を移住させるだけの王様の政治と何もしない隣の国の政治とは、いわば『五十歩百歩』で、大した違いはないのです。」と言ったのである。

このように、故事成語とその意味だけではなく、成り立ち（エピソード）にも注目させて、第4次の辞書クイズにつなげていった。

<第3次 「矛盾」とはどのような故事成語か理解しよう>

第3次では、「矛盾」の成り立ちについて学んだ。楚の国の人で、盾と矛を売る者が、自分の盾のことを誉めて、「私の盾は堅くて、これを突き通すことができるものはない。」と言った後、矛を誉めて、「私の矛は鋭くて、突き通せないものはない。」と言った。それを聞いていた人が、「あなたの矛で、あなたの盾を突き通そうとしたらどうなるのか。」と言ったところ、それに対して答えることができなかつた、という故事に由来するものである。

ここでは、起こりうるパターンを生徒に考えさせた。そのパターンとは、

- ①矛が盾を突き通す。（矛は無傷）
- ②矛は盾を突き通せない。（盾は無傷）
- ③両方とも壊れる。

であるが、いずれにしてもこの商人の二つの言葉を両立させることはできず、結果として「つじつまが合わない」ということを理解させた。

<第4次 辞書クイズをしよう>

第4次では、より深く自分たちが担当する故事成語について学ばせるため、また、答える過程で、班員との交流や故事成語の成立過程を考える活動を行わせるために、クイズ形式を取り入れた学習を行った。

基本的には、単元外で行った辞書クイズの手順に沿って進めた。今回は、自分たちで出題する言葉を辞書から探していたが、今回は教師側であらかじめ10種類の故事成語を選び、そのエピソード

とともに正しい意味をカードにまとめておき、それをグループごとに1枚ずつ選ばせた(図3)。

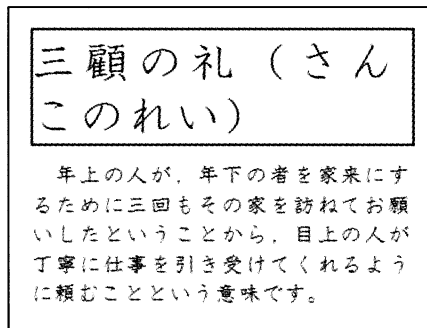


図3 故事成語カード

その上で、穴埋め式にした出題原稿の型を用意し、本当のエピソード・意味を記入したものと、偽のエピソード・意味を記入したものを準備させてクイズを出題させた。

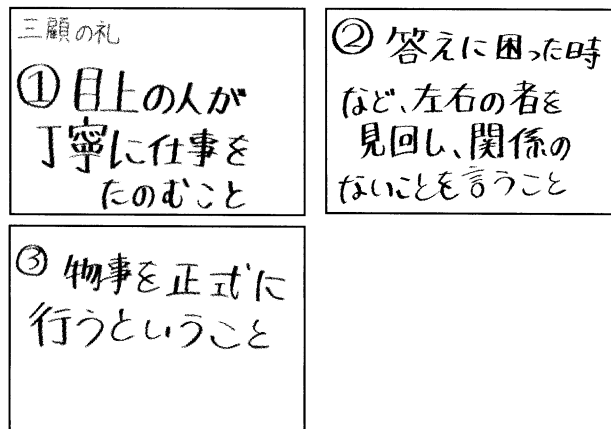


図4 選択肢の例(三顧の礼)



図5 出題の様子

事前に辞書クイズの形式には慣れていたが、故事成語版では、偽の意味だけでなくエピソードも考える必要があったので、その分高度なことが要

求されたと考えられる。

主な振り返りを挙げる。

- ・ 故事成語での辞書クイズはストーリーも書かなければいけなかったから、難しかったです。けどもう一度したいです。
- ・ 由来を考えるのが難しかったです。また、初めて知った故事成語の意味も知ることができました。
- ・ 今日は、聞いたことがあるけど意味はよく知らない言葉などを知れたのでよかった。
- ・ 班員と協力して考えることができたので良かったです。
- ・ 今日はいろんな故事成語がでてきたけど、2つしか知らなかったの、まだ自分が言葉を知らないということが分かりました。

3 結果と考察

本単元の評価は、前に挙げた生徒の振り返りにおける記述によって行った。

(1) 国語を尊重し、言語生活の向上を志す態度

(キャリアプランニング能力と関連) について

本単元は、古典に親しみ、国語を尊重する態度を育成することを目標として取り組んだ。生徒の振り返りからは、「よかった」「またやりたい」などの言葉が多く見られたことから、クイズ形式を取り入れたことにより、楽しみながら古典の学習を行い、古典に親しむことはできていたのではないかと考えられる。

ただ、それが純粋に「クイズ」としての楽しさなのか、それとも「故事成語のクイズ」だから楽しかったのかについては検討の余地があると考えられる。

(2) コミュニケーション能力の基盤を成す国語の

運用能力(人間関係形成・社会形成能力と関連) について

「班員と協力して」や、「みんなで話し合っなど、コミュニケーションを取りながら学習を進めている姿が振り返りからもうかがえる。その中

で、個人で考えるよりも、より深く学ぶことができているのではないかと考えられる。

(3) 論理的思考力・想像力の基盤を成す国語の運用能力（課題対応能力と関連）について

今回の辞書クイズでは、偽の意味とうまくつながる偽のエピソードも考える必要があった。そういう意味では、筋道立てて考える力も必要であったと考えられる。

生徒の振り返りからは、「前にやった辞書クイズよりも難しかった」という内容が多く見られた。まさに論理的思考力・想像力を駆使して学びを行うことができていたのではないだろうか。

4 終わりに

本研究の目的は、クイズ形式を取り入れた故事成語の学習の中で、成り立ちや意味を小グループで考えることを通して、古典に親しみ、国語を尊重する態度、延いては「通教科的能力」を育成するための中学校国語科の授業のあり方を明らかにすることであった。

以前行っていた授業では、故事成語を学習した後、その言葉を使って短文を作ることなどで、生徒の生活と結びつけることによって古典に親しむ態度を育成しようとしてきた。今回は、それとは違うアプローチを試みたのだが、「親しむ」という点においてはある程度の成果は得られたのではないかと考えられる。

ただ、やはり国語科の本質という部分から考えていくと、「思考・認識・伝達・創造の基盤を成す国語力」の育成に至っていたかどうかは疑問が残る。楽しく活動はできたものの、「故事成語を日常生活の中で使ってみよう」とまで生徒に思わせることができていないと考えられるからである。授業で学んだことを、「思考・認識・伝達・創造」に生かせる段階まで高められてこそ、意味がある。

このことは、今後、いわゆる「主体的・対話的で深い学び」を目指す上でも大切にしていきたいと考えている。

<引用・参考文献等>

- 1) 中央教育審議会：「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」，2016，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/c_hukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf.
- 2) 広島大学附属三原学校園：「国語科研究構想」，平成28年度広島大学附属三原学校園幼小中一貫教育研究会国語科協議会資料，2016.